



明治初期の消防組。中心に写っている纏まとは、消防組の精神的よりどころとなり、その下に総力を結集して消火に当たったので、「纏が火を消した」と言われるほどであった



円山地区で昭和19年に行われた防災訓練の様子。戦時中の防災・防火体制は、空襲に対する備えが最優先だった

下の写真は、望楼勤務の様子。24時間体制で、火災の早期発見に当たっていた。右の写真は、平成13年に完成した消防防災情報センター。いつの時代も、初期対応の大切さは変わらない



昭和25年8月、豊平地区は水害に見舞われた。昭和40年代までは、毎年のように市街地を襲った洪水だが、下水道の普及や河川整備により、今ではほとんど見られなくなった。今日では、こうした防災害対策も、消防の重要な任務となっている



待望の26階級のはしご車が配備され、望楼の前で放水訓練をする様子（昭和29年）。大通西1丁目の望楼（昭和2年完成）は東洋一とも言われ、解体される昭和40年まで札幌のシンボルの一つであった

写真提供…北海道大学附属図書館
札幌市文化資料室、札幌市消防局

大きな衝撃を与えた。この火災は、消防体制を強化させていく大きなきっかけとなった。消火には当然水が必要となる。下水道が引かれたため明治半ばからは、そこをせき止めて取水することが多くなった。しかし、下水道には吸水の妨げとなるごみや泥が多く、それを取り除くのに悪戦苦闘したという。昭和十一年に消火栓が全市に通水されるが、それが降も、しばらくは下水道の水が使われていた。中川組から、幾度か形を変えてきた消防組織。現在の自治体消防となったのは、昭和二十三年のことだ。これを境に、質的・量的にも飛躍的に発展。消火活動ばかりでなく、予防にも重点を置くようになった。今日では、高層建築物火災や化学災害など複雑化する災害にも即応できる機動力を備えるまでになっている。札幌の消防体制は、これまでも絶えず充実・強化されてきた。その重要性を再認識させたのが、平成七年の阪神・淡路大震災。いつ起こるか分からない地震には、常日ごろの備えを万全なものにし、市民が安全に暮らせる、“防災都市札幌”を築くため、札幌消防の活動は休みなく続く。